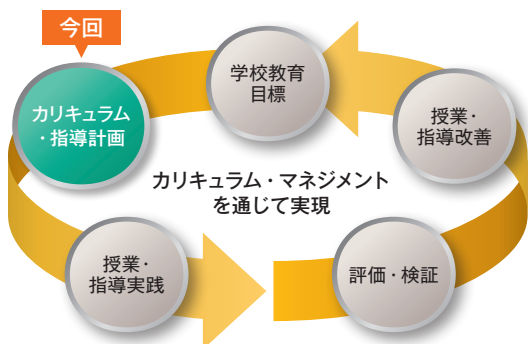


**改 革 事 例**

**育成を目指す資質・能力と学ぶ内容との関係を  
 明確化した教育課程表を作成し、確実に実践**

**新潟県立巻高校**



- ◎ 2012年度、新潟県の県立高校として初の進学重視型単位制に改組。学校設定科目を設け、生徒が自身の関心や希望進路に沿って学びを選択できるようにしている。男子バレーボール部と女子ホッケー部は2年連続で全国大会に出場。
- ◎ 設立 1906 (明治 39) 年
- ◎ 形態 全日制/普通科/共学
- ◎ 生徒数 1年次約 280 人 (全日制)
- ◎ 2018年度入試合格実績 (現役のみ) 国公立大は、千葉大、上越教育大、新潟大、新潟県立大などに 78 人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、法政大、明治大、新潟医療福祉大などに延べ 346 人が合格。
- ◎ URL <http://www.maki-h.nein.ed.jp/>



**教育・入試改革への対応も  
 見据え、新たな学校改革に着手**

県立唯一の進学重視型単位制高校である新潟県立巻高校は、国公立大学の現役合格者数が例年100人前後に上る地域の進学校だ。同校が新たな学校改革に向けて動き始めたのは、2017年の秋のことだった。18年度の1年次生は「大学入学共通テスト」を初めて受験する年次であるため、前年度中に学校教育目標を見直し、それを踏まえた教育課程や指導計画を作成する必要があった。高島徹校長は、学校教育目標を見直した理由について、こう説明する。

「探究学習や主体的・対話的で深い学びなどの様々な学習活動を行ってききましたが、学校全体の取り組みではなく、目的も年次によって差がありました。そこで、生徒に高校3年間で身につけさせる資質・能力を明確にすることにしました。教育方針や教育の目的は校訓などを基にした大局的な方向性を示しているものでしたので、生徒や教師に目指すゴールを具体的に分かりやすく示し、なおかつ高大接続改革や次期学習指導要領の趣旨にも沿った学校教育

育目標が必要だと考えました」

**教育課程や授業をイメージしながら、学校教育目標を検討**

学校教育目標の検討は、学校の運営方針を決定する「単位制推進委員会」で主に行われた。その委員は、管理職や教務主任、進路指導主事、各年次主任ら11人。委員会内にワーキングチームをつくり、まず素案を作成した。進路指導主事の竹内宏彰先生は、その時の状況をこう語る。

「ワーキングチームのメンバーで『VIEW21』高校版で参考となる事例を探したところ、具体的で分かりやすい学校教育目標を策定していたのが山梨県立吉田高校でした。同校を参考に、本校も学校教育目標を策定することにしました」

吉田高校では、「Yoshida PRIDE」を持つて未来を生き抜くことができ、生徒を育成することを教育の目的とし、その達成に向けた「教育の目標」に「自己肯定力」などの8つの資質・能力を育成することを掲げていた(本誌17年6月号P.10〜13参照)。巻高校もそれに倣いつつ、自校の生徒への育成を目指す資質・能

\* 「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6〜12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。



**佐久間純子**  
1年次担任  
教職歴17年。同校に赴任して7年目。教務部。



**竹内宏彰**  
進路指導主事  
教職歴19年。同校に赴任して8年目。



**小林都**  
1年次担任  
教職歴30年。同校に赴任して6年目。進路指導部。



**市村清貴**  
2年目。  
教職歴30年。同校に赴任して2年目。



**阿部見和子**  
白楊QUEST委員長  
教職歴31年。同校に赴任して6年目。進路指導部。



**高島徹**  
校長  
教職歴36年。同校に赴任して2年目。

力を議論。そして、「人間力」「飛躍力」など、8つの資質・能力から成る学校教育目標を策定した(図1)。「8つの資質・能力に決まるまで、委員会でも5〜6回検討しました。例えば、ワーキングチームの提案の中にあつた『成長力』には、『何をもつ

図1 学校教育目標

**教育方針**

「勤勞・廉直・恭敬」の校訓の下、明確な目標を持ち、自ら努力するとともに、親和協同して奉仕の精神と責任感を持って、積極的に行動する生徒を育成する。

**教育の目的**

- 心身ともに、健全で豊かな人間性の育成
- 伝統の「文武両道」へのさらなる研鑽
- 進路希望実現に向けた自立心・探究心の育成

**教育目標 (目的を達成するための方策)**

- 人間力/人間の魅力を高め、将来自立して生きていけるようになること
- 飛躍力/自分の持っている長所に気づき、それを生かして社会に貢献できるようになること
- 対話力/他者を思いやり、対話を通して新たな視点を獲得すること
- 行動力/行動を起こし、目的を実現させること
- 思考力/経験を振り返り、知識を基に柔軟に考えること
- 判断力/本質を見抜き、何をすべきか考えること
- 表現力/自分の思考を言葉や文章などで分かりやすく伝えること
- 探究力/森羅万象を深く追究すること

やや抽象度が高い人間力と飛躍力は、ほかの6つの資質・能力を身につけた上で最終的に獲得してほしい、より高次の力として位置づけた。

\* 学校資料を基に編集部で作成。

**8つの資質・能力を育成する  
学びを教育課程表で明確化**

18年1月、単位制推進委員会の提示した学校教育目標が職員会議で確

て成長したと言えるのか抽象的で分かりにくい』といった意見が上がり、再検討しました。その資質・能力を生徒に育成するためには、どういった指導や授業が必要か、教育課程にどう落とし込むのかまでを具体的にイメージしながら、学校教育目標を具体化していきました(竹内先生)

認められ、各教科・科目で8つの資質・能力をどの単元でどのように育成するのかを明示した教育課程表(教科年間計画表)の作成に着手した。まず、各教科・科目の代表から成る「教育課程委員会」が、『VIE W21』高校版の事例を参考にしながら教育課程表のひな型を作成。それを基に、各教科・科目では、18年度1年次担当予定の教師が中心となり、教育課程表の素案を作成した。それを教育課程委員会が検討し、修正を経て確定させた(P.28図2)。1年次担任の小林都先生はこう語る。

「新年度まで時間が限られていたため、学校教育目標の検討段階から準備を進め、1月以降に一気に作成しました。多くの教師が以前から授業にアクティブ・ラーニングの視点を取り入れていたので、教育課程表に8つの資質・能力を育成する活動としてグループワークや発表、リフレクションなどを盛り込むことはそれほど難しくありませんでした。8つの資質・能力と学ぶ内容の関係を示した教育課程表によって、各単元のねらいも明確になりました」

「白楊QUEST」と名づけて行う「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)も、8つの資質・能力を育成する活動・場面・方法を整理した。白楊QUEST委員長の阿部見和子先生は、こう説明する。

「進路学習では思考力や表現力、新入生宿泊研修では対話力や行動力といったように、活動ごとに育成を目指す資質・能力を明確にしていきました。その過程で、生徒が教師の話を聞くだけになっていくなど、8つの資質・能力のどの育成にもつながっていない活動は見直しました」

同委員会では、「白楊QUEST」や学校行事、生徒会活動などについ

\* プロフィールは2019年3月時点のものです。

図2 教育課程表2年次「数学Ⅱ・B」の例(抜粋)

育成を目指す資質・能力			資質・能力	知識・技能	思考力・判断力・表現力			主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度		コマ数
分野・単元・履修時期			資質・能力の説明	探究力	思考力	判断力	表現力	行動力	対話力	
第3章 図形と方程式	数学Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> <li>直線上の点・平面上の点</li> <li>直線の方程式・2直線の関係</li> <li>円の方程式・円と直線</li> <li>2つの円・軌跡の方程式</li> <li>不等式の表す領域・実数</li> <li>根号を含む式の計算</li> <li>不等式の性質・1次不等式</li> <li>絶対値を含む方程式・不等式</li> </ul>	第1回 調査まで	[方法] ・教科書の解説・例題を用いた対話型講義 ・教科書の問題をペアワークにより解答 ・週末課題として副教材A問題を解答 [目標] ・確認テストで8割以上正解	パフォーマンス課題：1h			リフレクション ◎	グループワーク ○	30
第1節 点と直線					グループワーク ◎	○	発表 ◎			
第2節 円	数学B	<ul style="list-style-type: none"> <li>ベクトル</li> <li>ベクトルの演算</li> <li>ベクトルの成分</li> <li>ベクトルの内積</li> <li>位置ベクトル</li> <li>ベクトルの図形への応用</li> <li>図形ベクトルによる表示</li> </ul>	第2回 調査まで	[方法] ・教科書の解説・例題を用いた対話型講義 ・教科書の問題をペアワークにより解答 ・週末課題として副教材A問題を解答 [目標] ・確認テストで8割以上正解	パフォーマンス課題：1h			リフレクション ◎	グループワーク ○	22
第3節 軌跡と領域					グループワーク ◎	○	発表 ◎			
第3節 1次不等式										
第1章 平面上のベクトル										
第1節 ベクトルとその演算										
第2節 ベクトルと平面図形										
第2章 空間の		・空間の点	・課題考査	[方法]						

\* 学校資料を編集部で改編して作成。教育課程表の全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け」をご覧ください。

て、各活動の目的・形態・内容などを示した「白楊QUESTノート」を作成し、生徒と教師に配布した。「8つの資質・能力は、教科・科目や総合学習、学校行事や生徒会活動、部活動など、すべての教育活動を通じて育むべきものです。どの教育活動においても、その活動は8つの資質・能力のどれを育成することを目的としたものなのかを、生徒や教師が常に意識できるように、冊子を作成しました」(阿部先生)

### 教師間で情報を共有し、一体感を持って活動を推進

そうして作成した教育課程表や「白楊QUESTノート」に沿った教育活動を、18年度の1年次生で行っていった。その際に重視したのは、一体感を持って活動できるような、教師間で情報を共有することだった。例えば、各教科・科目で取り組ませたパフォーマンス課題については原則公開とし、それらの課題をまとめた資料を全教師に配布して、知見を共有した。数学科では小テストを生徒自身に作成させたり、英語科では生徒が「日本のよいところ」をテー

マに英作文を書き、発表させたりした。そうしたパフォーマンス課題の実施と評価の方法を共有し、学校全体でノウハウを積み上げていった。定期考査の問題も、全校で共有した。同校では、「大学入学共通テスト」に備え、18年度から全年次の全教科・科目の定期考査で、思考力・判断力・表現力を求める問題を必ず10%盛り込むことにした。その問題も資料にして、定期考査後に全教師に配布している。1年次主任の市村清貴先生は、情報やノウハウの共有化についての同校の強みを、次のように語る。

「以前から、本校には公開授業を積極的に行い、互いの授業を見せ合う風土がありました。それが、今回の教育課程表の検討・作成や、それを実践する場面で、大きくプラスに作用しました。新たな取り組みを浸透させる際には、教師間の関係性がいかに構築できているかが大切な条件になると改めて思いました」

### 目標設定と振り返りの機会を、生徒に要所で提供

8つの資質・能力を確実に生徒に育成するために、生徒自身に目標を





## 社会で求められる 資質・能力をより意識 して指導するように

佐久間純子先生

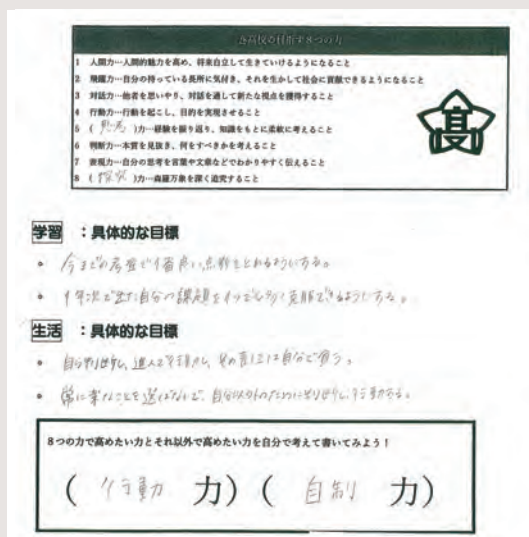
今回の取り組みを通じて、私自身が変わったなと感じるのは、「大学や社会がどのような資質・能力を持った人材を求めており、そのような人材を育成するために教師としての自分は何をすべきか」を、以前より強く意識するようになったことです。そのため、生徒への声かけの質やパフォーマンス課題における指導の内容などが変わりました。うれしいのは、グループワークや発表などの活動で、生徒たちが楽しそうに、そして真剣に取り組んでいることです。先日も「白楊 QUEST」でディベートを行った時、普段はおとなしい生徒が積極的に手を挙げ、発言する姿に驚かされました。今後の課題は、そうした活動を通じて、生徒たちが8つの資質・能力をどの程度身につけたかをどう評価するのか、その手法を開発していくことだと考えています。

立てさせ、その目標の到達度を振り返らせる機会を数多く設けている。まず、目標設定については、8つの資質・能力を高めるための学習面と生活面での具体的な目標を2か月おきに生徒に書かせ、各教室に掲示している(図3)。1年次担任の佐久間純子先生は、その意義をこう語る。「常に8つの資質・能力を意識して授業や学校行事などに臨むようにする上で、目標設定と振り返りには有効だと感じています。授業やホームルーム時に、折に触れて生徒に『8つの資質・能力を言ってみよう』と投げかけるようにしています」

また、各教科・科目のパフォーマンス課題で活用できるように、生徒が目標とする資質・能力がどれだけ身についたかを自己評価するシートを作成した。さらに、年度末には、1年間のパフォーマンス課題の取り組みを振り返り、気づいたことや得たことと、それらを今後どう生かしていくかをシートに書かせるとともに、その内容を「マナビジョン」のポートフォリオ(\*1)に記録させた。「振り返りでは、『○○がうまくできなかった』といった感想で終わらないよう、『できなかったことができるようになるために、これから何をしたいのかを、考えて書こう』と指導しています」(佐久間先生)

18年度の実践を通じて、教師が実感しているのは、生徒は教師の想像

図3 2か月目標(生徒の記入例)



2か月おきに学習面と生活面の目標を立て、それを記したシートを教室に掲示。シートには8つの資質・能力を明記し、学習面・生活面で立てた目標の達成を通して、中でも高めたい資質・能力を2つ、うち1つは8つの資質・能力にはない自分で考えた資質・能力を書かせる。  
\*学校資料をそのまま掲載。

以上に学習に意欲的なことだ。

「総合学習で地域と連携した探究学習を行った際、普段はおとなしく受け身だと思っていた生徒が、主体的に地域が抱える問題を調べ、その解決案を考え、それを地域の方の前で堂々と発表していました。そういった活動を通じて、自分はどうな資質・能力を身につけたいのかという目標が明確化され、アウトプットの仕方を知っていれば、教師が期待する以上の力を発揮するのだと分か

りました」(阿部先生)

学校教育目標の策定、それに基づいた教育課程表の作成とその実践という一連の取り組みを、同校では17年秋からの1年半の短期間で成し遂げた。高島校長は「走りながら、指導の形をつくってきた」と語る。未知の要素が多い取り組みだからこそ、計画を立てたらまずは実践し、その都度修正を加えながら、徐々に活動の質を高めていくという姿勢を、同校では今後も大切にしていく。

### 導かれた道標

カリキュラムは、都度修正しながらその質を高めていくことが、教師全員の確実な実践につながる

\*1 進路・進学応援サイト「Benesse マナビジョン」において無料で利用できるeポートフォリオ。